

〔翻 訳〕

『スペクテイター』 (61)

—第580号から第589号—

門 田 俊 夫

第580号 1714年8月13日(金曜日)

【アディソン】

天の最も輝かしい邸宅であるこの場所を
私は神々の宮殿と呼ぼう。(オウイディウス)¹⁾

前略

先の二通の手紙で神の遍在という荘厳で巨大なテーマについて考察しました²⁾。神はこの無限の空間の至る所に等しく存在していることを明らかにしたのです。この教えは理性にとって非常に心地よいものですから、啓発された異教徒の著述でもこれに遭遇します。もし他の人たちがすでに組み込んでいなければ、私の手で詳細に明らかにしたいと考えます。神は本来無限の空間の至る所に存在しているのですが、神が超越的かつ目に見える栄光を纏って姿を見せる場所があります。聖書で「パラダイス」、「第三の天」、「神の御座」、および「栄光のすみか」といった様々な呼称で記されている場所がそうです³⁾。わが救世主の栄光ある体が居住し、天上界の三大階級の天使やその他無数の天使団が神の御座を取り巻き、絶え間なくハレルヤや賛美歌を歌っているのがこの場所なのです。神学者たちの中にはこれを光栄ある存在と呼ぶ人もいれば、威厳に満ちた存在と呼ぶ人もいます。神は実際、ここだけでなく、本来あらゆる場所に存在しているのですが、明確に荘厳な姿かつ被造物の想像力に働きかけることが出来る輝きを放って存在しているのはこの場所なのです。

直観によるのか人類の始祖からの伝承によるのかは分かりませんが、全知全能の神が天国に存在しているのだというこの考えが、神の捉え方に意見の相違があっても、全世界に行き渡っているのは実に素晴らしいことです。かりに、ホメロスつまりギリシア最古の作者の書物に目を通してみますと、至高の神が天国に座しており、その中には御座の周りで

1) オウイディウス『変身物語』1.175-6

2) 第565号, 第571号参照。

3) 「パラダイス」は『コリント人への第二の手紙』第12章第4節, 「第三の天」は『コリント人への第二の手紙』第12章第2節, 「神の御座」は『ヨハネの黙示録』第7章第15節, 「栄光の住まい」は見当たらないが, 「聖なる住まい」は『イザヤ書』第63章第15節に登場。

絶え間なく歌っている詩神たちもいますが、下位の神々に取り囲まれていることが分かります⁴⁾。話題にしていますこの偉大なる真実の要点や骨子は誰にでもお分かりいただけます。とはいえ、その他の啓示された真実と同様に、寓話や造り話が混在していますが、異教の多くの著者がこの同じ教えをほのめかしています。異教の世界で最も啓発されているギリシア人やローマ人の考えにざっと目を通して見ますと、最近発見された国々の中に、天国は自分たちが崇拝する神のすみかであるという考えで育てられていない人はほとんどいないことが分かります。

ソロモンの神殿には至誠所があり、ケルビムたちに囲まれた目に見える栄光がそこに登場します、そして、人々の罪の償いをした後で、大祭司だけが入室を許されました⁵⁾。これと同じように、もし私たちが全創造をひとつの大きな神殿と考えますと、そこに聖域があり、人類の罪を贖った後に、私たちを救済する大祭司が入り、天使や大天使たちに囲まれて席についたのです。

神の御座を建立するにはどれほどの技術を必要とするのか。ヒラムに知恵を受けたソロモンが企てて建立するすみかはどれほど輝かしい意匠を施せば飾り立てられるのか⁶⁾。創造物のすべての技を駆使して、神が自らの姿をこの上なく荘厳に見せるために選んでいるその場所の威厳は何とも言いようがないほど素晴らしいものです。無限の知恵の指揮の下に創られた無限の力の建造物はいかなるものであろうか。魂の内奥、そして、神秘的な力と能力によって喜ばせうっとりさせる方法が分かっている神が、感動させるために創った諸々の物を見て、靈魂は言葉を尽くせないほど夢中にならざるを得ません。私たちはこの荘厳な神の存在に「見よ、月さえも輝かず、星も彼の目には清くない⁷⁾」という聖書の美しい表現を付け加えることが出来るかも知れません。太陽の光や私たちが住んでいるこの世界のすべての輝きは、神の御座の壮麗さに比べれば、弱々しくかつ淡いかすかな光というかむしろ闇そのものに過ぎません。

この場所の栄光は想像力を越えています、おそらくこの場所の広さも想像がつかえません。光の背後に光があり、栄光の内部に栄光があります。このように神が申し分のない威厳に満ちた姿で登場する空間がどれほどのものか、私たちは多分想像することは不可能です。この空間は無限ではありませんが、明確でないのかも知れません。それ自体無限ではありませんが、創られた目あるいは想像力からすると無限なのかも知れません。もし神が下位の物質界を死すべき存在のすみかにしては考えられないほど広く壮大なものになさったのであれば、神のすみかはこの上なく広大なものと考えられるかも知れません。神は自らのすみかを特別なものにされ、無数の天使たちやまっとうされた義人の霊に囲まれて栄光に包まれた姿で登場なさるのです⁸⁾。

4) 『イーリアス』第2書484行他。

5) 『列王紀上』第8章第6-第11節。

6) 『列王紀上』第5章第7-第11節。

7) 『ヨブ記』第25章第5節。

8) 『ヘブル人への手紙』第12章第23節。

無限の力と無限の知識をいかに発揮されているこの場所について思いを馳せますと、いくら想像力を掻き立てても掻き立て過ぎることはないのは確かです。なぜなら、無限の力と無限の知識は、私たちの想像を越えた卓越して栄光に満ちた光景を限りなく生み出すことが出来るからです。現在そこに住んでいる生き物にふさわしい自然の外界のすみかは、あらゆる物が完成した時点で、ここで私が述べています栄光の場所に取り入れられ付け加えられたのだと考えられないことはありません。そうすることで、神のすみかは死を免除され、不完全さが一掃された存在にとってふさわしいすみかとなっているのです。なぜなら、「美の住む新しい天と新しい地」⁹⁾について語るとき、聖書ではそのことを暗示しているように思えるからです。

この栄光の場所については、他の感覚もまた同様に最高の喜びを覚えることが大いに考えられますが、視覚と想像力についてのみ考察しました。調和ほど魂を恍惚とさせ、また、夢中にさせるものはありません。この場所に関する聖書の記述から、こここそが楽しみのひとつであると信じる大きな理由があります。もし魂が人の技が生み出すことが出来る旋律に大きな感動を覚えるとしたら、調和の力が完全な形で発揮されているこの場所の旋律によって、魂はこの上なく元気づき高揚することになります。魂と体が結合している間に五感を働かすには体に適切な道具を必要としますが、五感とは魂の機能です。それゆえ、来世の幸せを作り上げることになる諸々の楽しみの中から、体験上魂の大きな喜びの入口であると分かっているこれらの機能の喜びを排除する訳には行きません。聴覚や視覚がとても心地よく、下位の自然界では会えることが出来ないこれらの物を聞いたり見たりして満足しない訳がありません。これらの物とは、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったこと」¹⁰⁾のことです。(パウロは自分のことを語るのですが)「わたしはキリストにあるひとりの人を知っている。この人は十四年前に第三の天まで引き上げられた。(それが、からだのままであったか、わたしは知らない。からだを離れてであったか、それも知らない。神がご存知である)。この人が、(それがからだのままであったか、からだを離れてであったか)、わたしは知らない。神がご存知である」、パラダイスに引き上げられ、そして口に言い表せない、人間が語ってはならない言葉を聞いたのを、わたしは知っている」¹¹⁾。これは、彼が聞いたことはそれまで現世で聞いていたこととは限りなく異なっており、聞き手のその観念を伝えることが出来るような言葉では言い表すことは不可能だと言いたいのです。

私たちがしばらく滞在することになる外国のことに関する照会を喜ぶのはごく自然なことです。私たち誰もがこの栄光の場所に迎え入れられたいと願っていますので、導き手の啓示を活用しながら、この場所に関する可能な限りの情報を手に入れることは賞賛に足ることであり同時に好奇心を引くことでもあります。この不滅のドアが開けられますと、この場所の喜びと美は私たちの現在の希望と期待よりも限りなく勝っていること、そしてま

9) 『ペテロの第二の手紙』第3章第13節。

10) 『コリント人への第一の手紙』第2章第9節。

11) 『コリント人への第二の手紙』第12章第2-第4節。

た、神の御座にいます栄光の姿は私たちの想像を絶するものだという事は確実にと思われれます。聖書で出会ういくつかの暗示から、このテーマについてほかにもいろいろ思索が出来ます。たとえば、被造物それぞれに栄光の邸あるいはすみかはあるのかどうかといったこととか、完全さという点で他者より秀でているときには、それだけ神の御座に近づくことが出来、より明らかな神の存在に接することができるかどうかということとか、天国の群衆が創造主の存在を並外れた形の賞賛と崇敬の念で祝福するとき、どれだけ荘厳であるのかどうかといったことなどが想定されます。また、それまで無垢な状態であったアダムはほかの日とは違った形で安息日を守ったかどうかといった問題もあります¹²⁾。この喜ばしい場所の住人になりたいという気持ちを注入するために利用する限り、私たちはとても無邪気にこういった思索に耽ることが出来ます。

今回の手紙および先の二通の手紙において、私は神の遍在というとても真剣なテーマを取り上げました。このテーマは、出来れば、私たちの瞑想から除外すべきではないと考えます。神は無限の広がりの中に住み、神の御業の中に住み、人の心に住み、さらに、祝福された場所ではより輝かしい存在となるのだと考えて来ました。こういった考えを持ちますと、私たちは時所を問わず絶えず覚醒し、永続的な畏怖と崇敬の念に包まれることになります。これは私たちの思考と知覚の中に織り込まれ、私たち自身が存在しているという意識と一体化します。これは哲学の冷淡さでは考えることは出来ず、驚くばかりに偉大で、驚嘆すべき、神聖な神の前でひれ伏して初めて可能なのです。

草々

第581号 1714年8月16日（月曜日）

【バジエル】

あなたが今読んでいるものの中には、良いものも、
まずまずのものも、よりひどいものもある。(マルティアリス)¹⁾

私は現在、観察者宛ての山のような手紙を前にして座っています。恋人たちの不満や企画者の計画やご婦人方の中傷や祝いの言葉や賛辞や助言などがふんだんに寄せられている訳です。

私は手紙を貰い始めてすぐに誰もが自分の書いたことに対して抱くに違いない当然の愛着に気づきました。そこで、寄稿者たちのことを少々無作法に扱って、手紙はすべてファイルに入れ込んでほったらかしにしておくことを考え始めています。そこで、今後は受け取る手紙についてはほんの少し気に掛けるだけに留め、多分月末になると思いますが、それに触れるに留めることにしたいと思います。

その間に、本日の紙面ではすでに寄せられている手紙への簡単なお返事をしたと思い

12) 17世紀の神学ではアダムが安息日を知っていたかそしてそれを守ったかについて議論があった。「安息日を心に留め、これを聖別せよ」という第四戒に関わって議論されたのである。

1) マルティアリス『警句』1.16.1-2

ます。

みなさんは、ご自分への愛着をお持ちですが、私の秘密をすべて打ち明けて欲しくないと思っいらっしゃいます。大半の人にとって私は難解に見えますが、特定の寄稿者に理解されればそれで十分です。

人に好意を寄せるヴァン・ナト氏はとてもお茶目ですが、活字にするほどではありません。

フィラデルファスは、近々、現在印刷中の論文でご質問に対する十分な回答を手に入れることとなります。

この場合、ジー氏に従うのはどう見ても適切ではありませんでした。

キティ嬢には免除していただくかはなりません。

愛人たちのダンスについての詩を送ってくださった紳士は、恋に夢中になり過ぎてきちんとした作詩が出来ていないものと思います。

私は両大学に対して大きな敬意を払っていますので、どちらかを犠牲にして一方だけを誉めることは出来ません。

トム・ニンブルは非常に誠実な人ですので、私のことを従兄弟のフィル・バンパーによりしくお伝えして欲しいと思います。

偏見についてのお手紙は感謝しています。

グレース・グランブルのことについてはやがて論評するかも知れません。

ピー・エスの嘆願については了解。

サラ・ラヴィットの嘆願は却下。

エイ・エスの書類は返却。

アリスティッポスの親切な招待には感謝します。

10マイル圏内にすべてを引き受けるなんて、ウッドストックのわが友は勇敢です。

トム・ターンオーヴァーの楽しみは善良なるロンドン、ウェストミンスター両市にはほとんど受け入れられないものと思います。

ダブリュー・エフに婦人のストックキングで無遠慮な振舞いをさせるには、もう少し検討しなくてはなりません。

故観察者の頌詩を送ってくれた聡明な紳士には感謝します。そこでこの紳士の先回の手紙については特別な注意を払うことにします。

『恋人』²⁾の一節に関する7月20日付けの手紙をくれたご婦人の指示がもっと執拗になるようでしたら、返事を致します。

私の著述で彼の言うような細君を罵倒できる夫を改心させることが出来ると思っている気の毒な紳士は、私の能力を高く評価し過ぎているのではないかと思います。

フィランソロポスは、おそらく、善意の人なのでしょうが、文章がくど過ぎます。

コンスタンティウスは彼の言う一件については最良の裁き主であるに違いありません。

2) これはスティールが1714年2月25日から5月27日まで出した定期刊行物。

リンカーンからの日付のある手紙は受領。

アレトウサとその友人にはさらに私から返事をするかも知れません。

シーリアは少し性急すぎます。

ハリオットは善良な娘さんですが、知らない人に膝を曲げてお辞儀をしてはいけません。率直に打ち明けなくてはなりません、わが友 Sampson・ベントスタッフにはほとんどと参ります。一言も理解できない長文の手紙をくれたのです。

コリダンもまた、「採泥器でさらう」で何が言いたいのか説明をする必要があります。

ゆでだんごの件に関心を持つことは観察者の威厳に値しないと思います。

経度の発見に関する事業については³⁾、学者たちに相談することにします。

本日の紙面を締め括るにあたって、実に誠実な手紙を2通掲載するのがよいと思います。これらは男女両性の寄稿者からいただいたこの上なく気の利いた手紙だと考えます。

同志である観察者殿へ

貴殿は目に留まるあらゆる物を取り扱っておられますが、小生はある人にすっかり夢中になっています。もし美とは何かを求めたあの賢人が生きながらえて小生が愛する可愛い天使のような女性を見ていれば、そんな質問を発しなかったものと思います⁴⁾。別人が彼女を見ていたら、その人も神が美徳を目に見えるようにしてくれたこの女性を愛していたことでしょう。そして、もし貴殿が彼女と同席することがあれば、彼女の素晴らしい気立てと思慮分別についてどれほど言葉を尽くしても語り尽くすことは出来ないでしょう。この美しい女性の主な特徴をお送りします。本人の主な特徴を語り尽くせないのは、十分に賞賛し尽くせないのと同じことなのです。

草々、コンスタンティオ・スペー

小気味のいいお方へ

どんなことがあってもつぎの質問に決着をつけてください。これまでは毎日お喋りをなさっておられたのに、今では水曜日と金曜日と月曜日だけにのみ、お喋りのふりをなさっておられる理由は何なのですか。もしこの状態が貴方の寡黙さから生じているのであれば、不足分の埋め合わせをするために、話を長くなさってください。

草々、アマンダ・ラヴレングス

第582号 1714年8月18日（水曜日）

【アディソン】

詩歌の魅力は私たちの魂を魅了する、
執筆の呪いは際限のない渴望である。(ユヴェナリス)¹⁾

3) ウィリアム・ホイストンとハンフリー・ディットンとの企画については、アディソンが『ガーディアン』107号（1713年7月14日）にて公表していた。

4) 第144号参照。

ガレノスもヒポクラテスもはたまたロンドン施療院でも言及されていない病気があります。本日のモットーで、ユヴェナリスはそれを「むずがゆさ」と呼んでいます。これは平易な英語で言えば「執筆に対する渴望」となります。このむずがゆさは天然痘のように伝染します。人生のある時点でこれに襲われない人はごくわずかです。これら二つの病気、つまり、天然痘とむずがゆさには違いがあります。天然痘の場合は、一度罹ってしまうと、二度とぶり返すことはありません。ところが、今話題にしています病気はいったん罹ってしまいますと、治癒することはほとんどありません。わが国の人々はこの病に随分苦しんでいます。この病に侵された人にはいろいろな治療が施されましたが、治った人はほとんどいません。中には風刺文や風刺詩で焼灼された人がいますが、その効き目はほとんどありません。また中には、この病が猛威を振ったときに治療のために用いられる切れ込みのある板の間に1時間ぶっとおしで頭を固定された人もいます。実際には、タランチュラ(毒グモ)²⁾に刺されたときのように、一般に「ネコの鳴き声(口笛)」³⁾という名で知られている楽器の音で治る類いの病気もあります。しかし、もしあなたがこの種の患者を治療中でしたら、ペンとインクと紙の使用を禁止するしか効果的な治療法はないと確信なさるかも知れません。

ところで、飽き飽きさせる前にこの寓話を止めるとしますと、定まった日と回数でお目見えする定期出版物の作者ほど不快で救いがたいへぼ文士はほかにはいません。こういった作者の作品を熟読しても慰めとなることは何もありません。ほかの誰の作品を読んでもそうなのです。つまり、彼らの労作を最後まで読み通せるだけの忍耐があるかどうかの問題となる訳です。私はしばしばディオゲネスの滑稽な格言に感心したことがあります。友人たち数名を相手に退屈な作品を読んで聞かせているとき、みんながうんざりし始めると、もう少しで最後の白紙のページになると分かった彼は、「みんな！勇気を持って、陸が見えた！」⁴⁾と大きな声を上げたのです。それに対して、私が今お話をしています類いの作者たちの旅には終わりがありません。仕事が絶えることはなく、いつになったら解放してくれるのか分からないのです。

人類にとって最大の祝福であるはずの印刷術が有害だと、そしてまた、それが真実と知識を伝えるのではなく、偏見と無知をまき散らすために利用されていると考えることは憂鬱なことです。

最近、『ウィリアム・ラムゼーの天文学弁護』という非常に風変わりな論文を読みました⁵⁾。この学識のある著者は神秘的な文章をいろいろ書いていますが、その中に、「太陽の不在が夜の原因ではない。なぜなら、太陽の光はとても強力で地球全体を同時に白昼のように明るく照らすことは出来ますが、夜を引き起こす暗くまた薄暗い星々があり、この星々

1) ユヴェナリス『諷刺』7.51-52

2) 『タトラー』47号で、スティールは「癩癩」を「毒グモ」になぞらえていた。

3) 第361号参照。

4) ディオゲネス・ラエルティオス『著名哲学者の生涯と教説』6.38-39

5) ウィリアム・ラムゼー、1653年。

が、太陽が光を放つように、地球に闇と薄暗さを放射するからです」という文章があります。

この学識のある天文学者が天体について考察するのと同じ観点から、私は作者たちのことを考えます。作者たちの中には光を放つ者と闇を放つ者が存在する訳です。暗い1等星の作者たちを数名挙げて、調和する気がなく、暗い星座と見なすことが出来る紳士たちの一団を指摘できます。わが国はかなり長い間に渡ってこういった「反発光体」たちのために暗闇に包まれて来たのです。私が我慢できるうちは、彼らには勝手に闇を放たせておきました。しかし、ついに彼らに対抗する決意を固めたのです。そして、近いうちにイギリスの半球から彼らを完全に追放したいと思います。

第583号 1714年8月20日（金曜日）

【アディソン】

ミツバチの管理者は自分の手でマツの挿し枝を求めて
山の木々を隈なく捜すかも知れない。
そして、平地に野生のタイムとセイボリーを植える。
その結果、彼の硬く角質の指先は痛みでうずく。
実を結ぶ木々で畑一面を覆い、
大地はすがすがしい水で一杯にする。(ウエルギリウス)¹⁾

人生のあらゆる持ち場にはそれにふさわしい義務があります。好んで特定の仕事に就く決意をしている人々は、確かに、必要に迫られてそうしている人々より幸せですが、双方とも同じように、自分たちにとって有用か他人にとって有益などどちらかの仕事に取り組む義務を背負っています。わが始祖およびその子々孫々に至るまで通告された労働と勤勉から自分は免除されていると考える男性は誰もいません。生まれあるいは資産によってこの適用が不必要に思える人たちは、他の人々のお荷物となり、被造物の無用な一員とならないために、自分のために何らかの職業を見つけ出すべきです。

わが国の紳士の多くは例外なく狩猟とか野原や森で見つけるその他の気晴らしに精を出します。このため、わが国の著名な作者の一人は、紳士たち全員が、「さあ、向ってこい。お前の肉を、空の鳥、野の獣の餌食にしてくれよう」²⁾という言葉で宣告されるある意味で呪われた存在なのだと描写しました。

この種の運動をほどほどにするのであれば、心身にいい影響を与えますが、わが国にはもっと高尚な娯楽がいろいろあります。

中でも、それ自体楽しく、人々にとって有益なものとしては「植栽」に勝るものはないと思います。資産がイングランドの数か所にあり、こういった目に見える痕跡はいつも置

1) ウェルギリウス『農耕詩』4.112-15

2) 『サムエル記上』第17章第44節。

き去りにして、植栽に力を注いでいるある貴族の名を挙げるのが可能です。彼は家を借りるときは必ずその家の周囲至る所に富の種を撒き、所有者の子孫の遺産としたのでした。もしイングランドのすべての紳士が地所をこのように改良していれば、今頃は全土が広大な庭になっていたに違いありません。また、高貴な人たちがこういった仕事をするのを恥ずべきことだと考えるべきではありません。ほかのことでもそうですが、この植栽という技術で業績を上げた人たちがいます。とりわけ、キュロス大王は劣ったアジア人全員に仕事を与えたと言われています³⁾。確かに、この種の楽しみには実に素晴らしい点があります。自然のあちこちにより気高い雰囲気を与えますし、大地を様々な美しい光景で満たします。そこには創造の喜びのようなものがあります。そのため、植栽者の喜びは詩人の喜びと同じです。アリストテレスが言うように、詩人は他の誰よりも自分の作品に愛着を覚えるものです⁴⁾。

植栽にはほかの大半の仕事では見出せない利点がひとつあります。なぜなら、植栽はより永続的な喜びを与え、植栽者の目に絶えず楽しみを与えるからです。もし建物とか同種の仕事を完成したときには、それらは直ちに腐食が始まります。完成を目にしますが、その時点から荒廢の道を辿るのです。それに対して、植栽を完成したときには、あなたが生きている限り、引き続きより申し分のない状態に達しようとし、前年よりも翌年、さらにその翌年といったように年を経るにしたがって喜びは大きくなります。

ところで、ただ単にこの技術を愉快的な楽しみとして資産家にお勧めしている訳ではありません。これはある意味で徳高い仕事ですので、道徳的な動機からもお勧めすることが出来ます。とりわけ、国に対する愛情、さらに、子孫に対する配慮から見てもそうすべきです。国に対する愛情ということでは、他の人たちもしばしば語っていることを言えば済みます。つまり、森林樹を増やすことは決して森林樹の破壊バランスを保つことにはなりません。そのため、2、3年もすればわが国はイングランドの艦隊に十分な木材を供給するのに途方に暮れるかも知れません⁵⁾。この問題で子孫のことを口にする、その人は巧妙で利己的な人たちからは嘲笑の目で見られることは分かっています。大半の人はかつての大学生の気質を備えており、社会から子孫のためになるようなことをするようにと押し付けられると、とてもつむじを曲げ、「私たちはいつだって子孫のためになることをやっているさ、でも、子孫が私たちのために何かやるのを見たいものだね」と言うのです。

この種の義務を果たすことは非常に簡単なことですので、これを怠る人は許し難いと私は思います。地面に小枝を2、3本植えることが約50年後の人たちのためになることをしているのだ、そしてまた、ごくわずかな出費によって、おそらく子孫の誰かを安楽で豊かにすることをしているのだと考えますと、もしそれを嫌がっていると、自分は人類に対する寛大な心も愛情も欠いた貧しくさもししい心の持ち主だと断定しなくてはなりません。

私がここで述べていますことを力強く補強してくれることが一つあります。世の中のだ

3) クセノポン『キュロスの教育』8.1.39, 『家政論』4.8.20-24

4) アリストテレス『ニコマス倫理学』9.7

5) トレヴェリアン1.6参照。アン女王時代の関心事のひとつ。

めにそして人々のためになることをすることが当然だと考える多くの誠実な人々は、心の中で自分にはその能力がないと嘆くものです。それゆえ、これはほかの方法では国に十分に報い、子孫に気に入られるに十分な能力のない最も平凡な能力の持ち主にふさわしく、多数の人たちが行なうことが出来る立派な任務なのです。「あなたは彼の跡を辿るかも知れない」というのは、有用な田舎の隣人が亡くなったときに、私の友人が言ったことです。この言葉は、誠実な農夫の死に際して、彼が生きた代わりに勤勉であった彼の印象を伝える素晴らしい弔辞だと思います。

以上のようなことを考えたとき、私は本日のテーマが一種の道徳的美点なのだというのを控えることは出来ません。すでに明らかにしましたように、これにはまた喜びが伴います。正直言って、この喜びは若い盛りの人を満足させる激しい喜びとは無縁です。でも、喜びはあまり激しくない場合の方が、長続きするものです。自分が作ったものを眺めながら、一生懸命作った木陰の下を散策することほど楽しいことはありません。この種の楽しみは心を落ち着かせてくれ、魂を不安にさせる激情を鎮めてくれます。おまけに、こういった楽しみは自然に健全な思考を生み出し、賞賛に値する瞑想に耽らせることになります。古の哲学者たちの多くは生活の大半を庭で過ごしました。エピクロスは感覚的な喜びが獲得できるのは庭であって、庭以外の場所では駄目だと考えました⁶⁾。古代の偉大な天才であるホメロスやウェルギリウスやホラティウスに精通している人であれば誰でも、彼らがいかにうっとりと庭について語ったか熟知しています。とりわけ、ウェルギリウスは植栽ということについてまる1冊ものしたことを承知しています⁷⁾。

この技術は特に原始時代の人たちに適合したように思えます。原始時代の人たちにとっては、製作物がこの上なく美しく繁茂して行く様、そして、徐々に朽ちて行く様を目にするのに十分な生活があったのです。大洪水以前に生きた人は、実をつけた檜の大樹の森を目にしたかも知れません。しかし、これに関してはつぎの機会に譲るために、ここでは大洪水以前の物語として見られるかも知れない中国の話で見つけた話を挙げておくだけにします。

第584号 1714年8月23日（月曜日）

【アディソン】

さあ、どれだけの喜びが平原に満ちているか見てご覧なさい。

森や泉や花咲く大地に。きみは美しく、確かにそうだった。

私はここできみと共に生き、愛し、死ぬことが出来るだろう。

(ウェルギリウス)¹⁾

ヒルパはコフ（カインのことだという学者がいますが）の一族ジルパが生んだ150人の

6) ウィリアム・テンブル参照。

7) アディソンの『農耕詩』に関する随筆は、ドライデンの『ウェルギリウス』（1697）に掲載された。

1) ウェルギリウス『エクロガエ（詩選）』10.42-43

娘の一人でした。彼女は大変な美人でした。若干70歳のときに、彼女は彼女を愛した数名から求婚されました。この中に、ハーパスとシャラムという兄弟がいました。長男のハーパスは中国南部のターツァー山の麓にある実り豊かな地域の所有者でした。(中国語では農園主を意味するのですが) シャラムは隣接するすべての丘陵と広大なターツァー山脈を所有していました。ハーパスは横柄で人を馬鹿にしましたが、シャラムは温和で神からも人からも愛されました。

大洪水以前の女性たちの中でも、コフの娘たちはもっぱら富に関心を寄せていました。そのため、美貌のヒルパはシャラムよりもハーパスを選びました。というのは、ハーパスはターツァー山麓に位置し、山の両脇から流れ出るいくつもの泉や小川の水に恵まれた低地帯に数知れないほどの羊や牛を所有していたからです。

ハーパスは手早く求婚を済ませてヒルパと結婚しました。ヒルパはその時百歳になっていました。そして、横柄なハーパスは石と山しか所有していないのに、美しいヒルパに言い寄った弟のシャラムのことを嘲笑いました。そのことにとても腹を立てたシャラムは辛辣な兄を呪い、もし兄が山陰に来るようなことがあれば、彼の頭上に山が崩れて来て欲しいと願ったとのことです。

この時以降、ハーパスは敢えて谷間から出て行くことはせず、250歳で早すぎる死を迎えました。彼は渡ろうとした川で溺死したのです。この川には、死んだ彼の名をとってハーパス川という名前がつけられ、今日に至っています。そして、非常に注目すべきことですが、ハーパス川はシャラムが辛辣な兄を呪って、頭上に崩れ落ちて欲しいと願った山のひとつから流れて出ているのです。

夫が死亡したとき、ヒルパは160歳でした。すでに述べましたように、ハーパスが現世から急に運び去られるまでに、子供は50人しか生まれませんでした。誰一人最初の恋人シャラムのようにうまく行くとは思いませんでしたが、大洪水以前の人々の多くがこの若い未亡人に求愛しました。シャラムはハーパスの死後10年ほどして彼女に改めて求婚しました。なぜなら、当時、未亡人が夫の死後10年以内に男の人と顔を会わせるのは慎みがないと思われたからです。

深い鬱状態に落ち込み、最初にヒルパに求婚したとき障害物となったものをすべて取り除くことを心に決めたシャラムは、彼女がハーパスと結婚した直後に、自分の分け前となっている山岳地帯全域に植樹を始めました。彼はどの植物がどの土壌に順応するか分かりました。彼はこの技術のさまざまな秘訣を始祖から引き継いでいたと考えられます。この仕事がやっと彼の楽しみだけでなく彼のためにもなることが分かりました。2、3年すると、山々は若木で覆われ、徐々に成長し木立、森、森林となって行き、そこに散歩道や芝生や庭が出来ました。全域が裸で荒れ果てた眺めから今では第二のパラダイスのように見え始めました。この場所の心地よさと大洪水以前の人たちの中で最も温暖で賢明だと思われるシャラムの感じのいい気質のお陰で、多くの人々がここに引き寄せられました。彼らはひっきりなしに、井戸の掘削や壕作りや木々の伐採や広大な農園中にうまく配水するなどの仕事に従事しました。

ヒルパの目には、シャラムの住まいが年を経るごとに美しくなっていくのが分かりました。秋が70回過ぎると、ヒルパは彼方にあるシャラムの丘陵を眺めて実に満ち足りた気持ちとなりました。その頃になると、この丘陵は無数の木々の茂みや荘厳な雰囲気添える薄暗い場所で覆われ、人が見つめることが出来る最も素敵な景色となっていたのです。

シャラムが未亡人となって11年目のヒルパに宛てたとされる手紙を中国人が記録に残しています。ここで、その手紙を原文にある気持ちの気高い素朴さと率直な態度を損なわずに翻訳したいと思います。この時、シャラムは180歳で、ヒルパは170歳です。

ターツァー山の所有者シャラムから谷間の女主人ヒルパへ
天地創造後788年

ああ、ジルパの娘である君よ、君がわが好敵手と結婚してからというもの、私はどれほど苦しんだことだろうか。私は太陽の光に耐えられなくなり、それ以来ずっと森の中に隠れ住んで来ました。70年間に渡って、私はターツァー山上で君を失ったことを嘆き悲しんで暮らして来たのです。そして、私の手で育てた無数の薄暗い木陰の中で私の鬱々とした気持ちを慰めて来たのです。私の住まいは今では神の庭のようになり、至る所に果物や花々や泉が溢れています。山全体が君を受け入れるために香りで満ちています。ああ、愛する君よ、やって来て、新世界であるこの場所で美しい人と一緒に過ごさせてください。そしてこの楽しい木陰に囲まれてしっかり子孫を増やし、至る所に息子や娘で満たそうではありませんか。ああ、ジルパの娘である君よ、人の寿命は千年に過ぎず、美が称えられるのはほんの2、3百年に過ぎません。美は山の檜の木のように、あるいは、ターツァー山上の杉の木のように花開いていますが、3、4百年もすれば、色褪せてしまい、若木が根から成長して来ない限り、子孫から何とも思われなくなってしまいます。以上のことをよくお考えいただき、山に住む君の隣人のことを忘れないでください。

以上現存している唯一の大洪水以前の恋文と思われる手紙を掲載しましたので、つぎの紙面ではその返事を紹介し、この物語の続きを説明したいと思います。

第585号 1714年8月25日(水曜日)

【アディソン】

山の頂は刈り込まれておらず、岩は喜び、
背丈の低い灌木は人の声を分かち合う。(ウエルギリウス)¹⁾

シャラムとヒルパの物語の続き

前回掲載した手紙はヒルパにとってとても効果的でしたので、1年しない内につぎの返事がありました。

1) ウェルギリウス『エクログエ(詩選)』5.62-64

谷間の女主人ヒルパからターツァー山の所有者シャラムへ
天地創造後789年

ああ、シャラム様、私はどうすべきでしょうか。貴方はヒルパの美しさを称えていらっしゃると思いますが、心の中では私の所有している草地の緑に魅了されているのではございませんか。貴方は私のことよりも緑の谷間に心が動かされているのではありませんか。牛や羊の鳴き声が貴方の所有する山々に心地よく響き渡り、貴方の耳に甘く響くのです。たとえ私が木々の揺れ動く様子やターツァー山上から流れて来る香りに満ちたそよ風を気に入っているとどうなのでしょう。それらは谷間の豊かさに匹敵するのでしょうか。

ああ、シャラム様、貴方のことは分かっています。息子たちの誰よりも貴方は賢明で幸福なお方です。貴方の住まいは杉の木立の中にあります。貴方はさまざまな土壌を見つけ出し、星の神秘的な力を理解なさり、季節の変化に注目なさっておられます。そういったお方の目に女性が素敵に映るなんてことがあり得ますか。ああ、シャラム様、私の心を乱さないでください。私が手に入れているこの素晴らしい領地を満喫出来るように、私のことはそっとしておいてください。心をそそるようなことを言って私に求婚しないでください。貴方の木々が繁殖しますことをお祈りします。さらに多くの森が出来、さらに多くの木陰が出来ますことをお祈りします。ヒルパをそそのかして貴方の孤独を台無しにし、貴方の隠遁地に人を入れないようにしてください。

中国人によると、その後しばらくして、ヒルパはシャラムが招待していた供応を受け入れて、隣接する丘陵のひとつにやって来たとのこと。この供応は2年間続き、この供応のためにシャラムは羚羊を2百頭、ダチョウを2千羽、牛乳を1千樽使用したとのこと。中でも際立っていたのは、当時の誰にも用意できないほどの様々な果物や香味野菜が食卓に上ったことでした。

シャラムは夜鳴き鶯のいる森の中に作ったあずまやで彼女をもてなしました。この森は様々な鳴鳥とともに心地よい果樹や植物から出来ていました。そこで、この森には国中のあらゆる美しい調べが集まり、1年中、季節毎の最も心地よい合唱が流れていました。

シャラムは毎日、この新しい森林地で彼女に美しく驚くべき景色を見せてあげました。こうすることで、彼はあらゆる機会を捉えて彼女にうまく自分の気持ちを打ち明けましたので、ヒルパは帰るときに、ある種の約束をして、50年以内に明確な答えを出すという約束をいたしました。

ヒルパが谷間に帰ってほどなくして、新手の打診があり、ミシュパッチの実に華麗な訪問がありました。この人は権力を持った老人で、自分の名前を付けた大都市を建設していました。どの家を作るにも少なくとも1千年かかりました。それどころか、三世に渡って貸し出されている家もありました。そのため、この都市を建設するときには、現代の人たちが想像できないほど大量の石や木材が消費されました。この偉人は彼女を最近発明されたばかりの楽器でもてなし、彼女の前でタンバリンの音に合わせて踊って見せました。彼はまた、利便を考えて最近作り出されたばかりの、真鍮と鉄で出来た家庭用器具をいく

つかプレゼントしました。その間、シャラムは非常に不安になって来て、彼女のミシュパッチへの対応に不快感を覚えました。その結果、土星が運行している間は、彼は彼女に手紙を出さず、彼女のことを口に出すこともしませんでした。しかし、この関係が訪問以上には進まないことが分かった彼は、再び彼女に言い寄り始めました。彼が長らく沈黙を守っていた間、彼女は頻繁にターツァー山頂を祈るような気持ちで見詰めていたとのことでした。

シャラムとミシュパッチのどちらを選ぶか決めかねる状態が約20年続きました。というのは、彼女の気持ちはシャラムにあったのですが、私利がミシュパッチを強力に勧めたからです。彼女の心がこのように定まらない状態のときに、彼女の選択を決定づけるつぎの出来事が発生しました。ミシュパッチ市にある高い木の塔が落雷で炎上し、2、3日で市全体が灰燼に帰したのです。ミシュパッチ市はどれだけ費用がかかろうとも市を再建することにしました。すでに国の木材はすべて使い尽くしてしまいましたので、彼は今ではその森が2百年経っているシャラムに頼らざるを得ませんでした。彼は大変な数の牛や羊さらには広大な畑と牧草地と引き換えにこの木材を購入しました。その結果、今ではシャラムはミシュパッチより豊かになったのです。それゆえ、ジルバの娘にはとても魅力的に見え、もはや彼との結婚を拒みませんでした。当日、彼は彼女を山へ連れて行きました。そこには、彼が育てた高さ約3百クービット（約156メートル）に達する大きな杉の木やありとあらゆる香木がありました。彼はまた、芳しい灌木をより豊かにし、農園を肥沃にしているミルラやカンショウの束に目をやりました。シャラムが結婚の日に提供した燔祭がこれだったのです。その煙は天にまで昇り、国中を芳香で満たしたのです。

第586号 1714年8月27日（金曜日）

【バイロン】

何を行うにしても、何を考え、何を気に掛けるにしても、
何を目にし、どんな目覚ましい活動をするにしても、夢の対象はある。
(キケロ)¹⁾

先の郵便でつぎの手紙を受け取りました。この手紙の内容は目新しく、うまく練られた考えに基づいています。そこで、変更も加筆も修正もせずにみなさんにお伝えしたいと思います。

拝啓

ピタゴラスは、弟子たちに「毎晩寝る前に自分は一日何をしたか吟味し、翌日もやる価値があるものは何か、うっかり習慣にすべきでない悪徳とは何かを見極めなさい」という素晴らしい助言を与えました²⁾。もし私がピタゴラスの助言を支持するとしても、私とし

1) キケロ『予言について』1.22.45

2) ヒエロクレス「ピタゴラスの黄金詩の注釈」、キケロ『老年について』11.38参照。

ては朝弟子が目覚めるまでに、自分が思い込んでいる状態が現実であると考えて、正確に夜何をしていったのか考えるようにしなさい、というのを私の助言にしたいと思います。こういった夢幻の行為を吟味してみることは大きな利点を生むに違いありません。人が睡眠中に考える事柄は一般にすべて善悪いずれにせよ自身の気性の裏付けとなり、それを最大限に追求する架空の機会を提供するからです。その結果、気性は意図に対して無防備となり、現実生活の出来事から生じる束縛から解放されて、どのように搔き立てられるかに関心を払うことになります。夢は確かに覚醒しているときの考えの結果であり、日々の希望や恐怖が真夜中の逍遥中に、心に鋭敏な喜びや厳しい苦痛を与えるのです。夢の中で敵を殺したり、友を見捨てたりする人は、復讐や忘恩から身を守り、欺瞞を追い求めたり、真の名譽をないがしろにしたりするといった恥ずべきことをしないように留意すべきです。私はどうかと言いますと、恩恵を受けることはめったにありませんが、一晩か二晩するととても素敵な報いがあります。恩人は少しも有利ではありませんが、私にある感謝の気持ちという信念から友人の親切に報いているのだと考えて、とてもうっとりとした気持ちになることが出来ると思うと満足するのです。無礼者が私の意のままになったとき、恨み過ぎていたのだと考えると、無礼で応じるのではなく、しばしば喜んで許しを請うことにしてきました。

幸不幸というものは大きく想像力によるものだという事は貴紙で何度も語られたことがあると思います³⁾。睡眠中の夢幻の不思議な作用の真実は注目に値する事例です。自分自身を発見するという利点だけでなく、自分自身の安らぎないし不安に注視すれば、私の助言を受け入れることになるかも知れません。私は進んでこれに従いたいものですから、「完全に激情から解放された心と一切暴飲暴食をしない体で眠りに就くこと」という金言を守って喜んでそうすることにします。

実際、本来の姿よりも穏やかあるいは無垢でない考えを抱きながら眠りに陥ることが出来る人々は、罪悪感と悲惨の場面に飛び込まざるを得なくなります。また、満腹感あるいはワインをしこたま飲むことと引き換えに進んで真夜中の不穏を得る人々については、彼らをどうしたら恥と恐怖に満ちた反省をさせたらいいか分かりませんので、何も言うことがありません。しかし、上記のルールを守る人たちについては、健康で機嫌よく目覚め、喜んで素晴らしい考えと性急な気高い想像力に耽る輝かしい瞬間に思いを巡らせることになるのは間違いありません。もし夕食を食べないで眠りに就き、偉大な君主か誰かの食卓に招かれ、豪華な食事にありつけたとしたなら、朝目覚めたときにはまるで一晩中断食していたかのように旺盛な食欲で朝食に向かうことでしょう。また、自分なら直ぐに解放することが出来たはずなのに、親友が一晩中落ち込んでいる姿を目にしたら、もう一本空けずに眠りに就いたことを満足していたに違いありません。本当に、こういった夢幻の効力は食欲を抑制したり満足させたりするさいに重要な役割を果たすのです。

私がすでに申し上げたことを貴方や貴方の読者がどのように受け止められるか分かるま

3) 第136号, 第167号参照。

では、私の助言をその他諸々のことに当てはめることは差し控えます。役に立たないと言う人がいるかも知れませんが、それは全く夢を見ないか、おそらく日中ほとんど何もしないからかも知れません。もし誰もが私のように睡眠中の出来事に鋭敏であれば、私たちがかなりな時間を木石状態で過ごしているのかどうか、また、魂が思考の本源に絶えず作用しているかどうかといったことは論争にはならないはずです。しかしながら、わが同胞を説得して顧みられることのない多くの時間から何らかの利点を手に入れてもらうことが私の心からの思いなのです。貴方からもお力添えをいただきたいと思います。

私の方針の概略を1, 2お伝えして締め括りたいと思います。

明日しなくてはならない何か重要な用件がある場合には、私は眠り込んでしまうことはほとんどなく、真夜中に目を開け、用件の全容を考えます。そして、太陽が昇るまでに翌日の経験の好都合な条件を入手します。

私がしばらく就いていた職ほど素晴らしいものはありません。大学の先生をしていたときの振舞いに私はとても満足していますので、その分野に空きがあるときはいつでも、出来るだけ早く潜り込む積りです。

私は空中を浮遊する、つまり、目に見えない技術があったときには、試験に合格しないいろいろな事をやって来ました。そこで、そういった異常な才能を持っていないことを嬉しく思っています。

最後に、観察者殿、私は貴方の熱心な寄稿者として務めて来ました。そして、私を書いたことがない私の手紙を貴紙で数多く拝見しました。もし貴方が寄稿者としての私を考えておられるなら、私は数多くの夢やその他雑多なものを記録に留めています。貴紙を飾るために適宜それをお送りしたいと思います。

敬具、ジョン・シャドウ

第587号 1714年8月30日(月曜日)

あなたのことはすべて分かっています、
浅はかな心根から最も外側にある肌に至るまで。(ペルシウス)¹⁾

つぎの夢の書き手を私は存じ上げませんが、前回記録の抜粋を送ってくれりと約束してくれた例の聡明な紳士の手になるものと思います。

前略

先日、私はマホメットの伝記を読んでいました。マホメットは突飛な言行には事欠きませんが、このペテン師について、4歳のとき友達と遊んでいると天使ガブリエルが彼を見つけて、脇につれて行き、彼の胸を切り開いて心臓をつかみ出し黒い血の塊を絞り出したとの記録があります。トルコの神学者たちによると、この血には罪惡の媒介物が入ってお

1) ペルシウス『諷刺』3.30

り、これを取り除いたことで、彼はその後罪悪とは無縁であったとのこと²⁾。私は直ぐにこの話は作り事だけれど、自分に当てはめ心臓にある罪悪とか邪なものを絞り出せば、実に素晴らしい教訓になると考えました。

もっばらこんな思いに駆られているとき、いつの間にかとても心地よい眠気が襲って来ました。そして、大きなチェストを抱えて二人のポーターが私の部屋に入って来たようでした。彼らはそのチェストを部屋の中央に置いて部屋から出て行きました。私は直ぐにそれを開けて見ました。すると、天使たちが描かれていると思える幻が目の前に現れ、私にチェストの中を見せてくれませんでした。中にはあなたの友人や知人の心臓がいくつか入っている、しかし、他人の欠陥を非難する資格を得るまでに、自分自身が汚れのない状態でなくてはならない、とこの幻が言いました。こう言うと、幻は切開用のナイフを取り出して私の胸を切り開き、心臓を取り出し絞り出しました。私はこの時、今までに美德として育てて来た多くのことが心臓から出て来るのを見て、非常に当惑しました。要するに、心臓を完全に絞ってしまうと、空っぽの袋のように見えたのです。するとそのとき、幻はその空の袋に神聖な空気を吹き込んで元の容器を復活させました。私の胸の縫合が終わると、二人してチェストの検査に取り掛かりました。

心臓はすべて小さなガラス瓶に収まっており、酒精と思えるリカーに漬かっていました。最初に目に留まった心臓は収納されているガラスを割ったのではと思いました。この心臓は信じられないようなスピードで浮いたり沈んだりしていました。そしてリカーの中を浮遊しながらさかんにガラス瓶の側面にぶつかっていました。媒介物つまり中央にある汚れは大きくはありませんでしたが、燃えるような赤色で、それがこの激しい動揺の原因のようでした。先生によると、これは先の戦争で勇ましく振る舞ったが、この10年間何か名誉ある職を手に入れようとして無駄に終わっているトム・ドレッドノートの心臓とのこと。彼は最近田舎に引きこもり、すっかり不機嫌と痲痺持ちになってしまい、自分よりも恵まれている人に毒づき、不安は絶えることがないのです。なぜなら、彼は自分の長所が十分に報われていると思うことが出来ないからです。つぎに調べた心臓は驚くほど小さいものでした。この心臓はガラス瓶の底でじっとしていました。そのため、鼓動しているのかどうかほとんど分かりませんでした。媒介物は真黒で、ほぼ心臓全体に広まっていました。先生によると、これは望むものはひとえにお金だというディック・グルーミーの心臓とのこと。彼はありとあらゆる努力をするのですが、それでも貧困から抜け出せません。そのため、彼は非常に惨めな憂鬱と絶望状態に陥っている訳です。彼は妬み深く怠惰であり、人々を憎みます。でも他の誰に対してよりも自分自身が不安になることで復讐をしているのです。

つぎに調べたガラス瓶にはとても鼓動がしっかりした大きくて綺麗な心臓が入っていました。媒介物つまり汚れは非常に小さなものでしたが、ガラス瓶のどこから見ても、心臓は最上の場所を占めており、最も強力な光を受けていたと言わざるを得ませんでした。わ

2) この逸話は『トルコのスパイ』第三書に登場。

が相棒によると、これはウィル・ワージーの心臓とのことです。彼は確かに非常に気高い魂の持ち主で、無数の美点を備えています。分かる欠点とえば「虚栄」です。

これはあなたの親友のフリーラブの心臓です、とこの天使は言います。フリーラブと私は今ではとても冷たい関係になっており、怨恨で包まれていると思う人の心臓を見たくありません、と私は言いました。私の先生は見るようにと命じました。そこで私は見ましたが、言葉では言い尽くせないほど驚いたことに、最初は私に対する悪意だと思った小さな腫れ上がっている汚れは単なる情熱に過ぎないことが分かりました。もっと近寄って調べて見ますと、その汚れがすっかり無くなりました。汚れが消えたとき、フリーラブは非常に善良な人なのです、とこの幻が言いました。

つぎはあなたの知っている女性の心臓です、と私の先生が言います。この媒介物は最大であり、今でも刻一刻変化している実に様々な色を帯びています。誰の心臓ですかと尋ねて見ると、コケティラの心臓とのことでした。

私はその心臓を置き、つぎの心臓を取り出しました。その媒介物は最初見たときにはとても小さなものでしたが、しっかり見ていますと、段々大きくなっていくのが分かって驚きました。それは私の家の隣に住んでいる気取り屋さんで名高いメリッサの心臓でした³⁾。

つぎはとても珍しい心臓を見せてあげます、誰の心臓か分かるとあなたは嬉しくなりますよ、とこの幻が言います。彼はそう言うと、私の両手を心臓が入っている大きなクリスタルガラスの中に入れました。私はその心臓をととても詳しく調べましたが、汚点を何ひとつ見つけることが出来ませんでした。これはセラフィーナの心臓に違いないと断言するのに一切ためらいはありませんでした。その通りだと分かり、なるほどと嬉しく思いました。実際、彼女は私の導き手であり、女性の妬みであるだけでなく鏡なのです。こういって、この幻はそれぞれのガラス瓶に入っており、大きな真っ青の汚れがある彼女の知り合いの女性たちの心臓をさし示しました。墮落した時代の悪弊に耐えている心臓に何らかの汚れがあっても驚いていけません、もし汚点があっても、それは人間の目には見えないほど小さなものなのです、と彼は言います。

私はセラフィーナの心臓を置き、別の女性たちの心臓を手にししました。これらの心臓では媒介物が絡んだ血管の中を流れており、とても複雑な形状になっていました。その意味を尋ねますと、それは「欺瞞」ということでした。

飲酒や賭博や術策などに著しく溺れていると思う知人の心臓を調べて嬉しく思うはずでしたが、わが解説者は、それはつぎの機会にしようと言って、非常に乱暴にチェストの蓋を閉めてしまいました。蓋が閉まるや否や私は目覚めたのでした。

草々

第588号 1714年9月1日（水曜日）

【グローヴ】

3) コケティラ、メリッサという女性は第377号にも登場。

善良さとか慈善というものはその基盤を弱さにおいている、
とあなたは言う。(キケロ)¹⁾

人間は理性的な存在と社会的な存在という二つの観点から考えることが出来ます。つまり、人間は自分が幸福ないし不幸になることが可能であり、同時に、同胞の幸福ないし不幸に貢献することが可能です。この二重の能力にふさわしくなるように、人間性の考案者は賢明にも人間に自己愛と慈悲心という二つの行動原理を備え付けました。一方は絶えず自分自身の利益のことを意識させること、他方は同じ営みに従事している人たちに最大限の助力をすることが意図されています²⁾。このことは理性にとっても、神のためにもまた人間のためにも非常にふさわしい私たちの構造に対する説明ですので、何故人間性が不利な立場に置かれるのかということとは少し不可解に思えるかも知れません。また、少々卑しむべき観点から人間性を指摘した場合に、そこからどんな喜びを見出せるかということも不可解なことになります。人々はそれが自分たち自身のことだと考えますか。また、人々が創始者より忌まわしくないのだと思ったらどうなるのでしょうか。人間性に対してこういった尊大な調子で語った最初の人物にエピクロスがいました³⁾。彼の弟子たちなら、慈悲心はすべて弱さにその基盤を置いているのだ、そして、エピクロスが何と主張しても、人と人の中で交わされる親切はすべて自分自身に向けられているのだと言うでしょう。このことは実はこの楽観的な哲学のほかの点と一致しています。この哲学は、人間を四大元素から成り立っているとした後で、存在を偶然性のせいにし、あらゆる行為は理解不能な原子のずれから生じるのだとしています。こういった輝かしい発見をしたエピクロスは、尊敬するデモクリトス礼賛に過度に夢中になります。まるで、人間が取るに足らないことで獣より優れていることを証明するためだけに、どうしても彼が人間以上の存在でなくてはならないかのように彼のことを礼賛します。この学派には、自らが発見した知識でない限り、同じように語るようにと教えたホブズ氏がいました。彼はどこかで不幸なことに、思考や感情がほかの人と類似している場合には、自分が考え、希望し、恐れているのだと思っ
ていても、それはすべて他者の思考や感情なのだと言明しているのです⁴⁾。さて、ホブズ氏には最善の方法を知っていただくことにします。でも、真剣な話ですが、私は自分が彼の言うように無愛想な人物だと考えると、ほとんど自分に愛想がつきてしまい、他人に対しても自分に対しても優しくなれません。これまで私はいつも親切で慈悲深い性質は元々人の心が生み出すものであって、心の中に湧いてくる敵対する気持によって阻止されても、最悪に働く力はわずかであって、最善に働くものだと考えて来ました。あらゆる存在の中で最も慈善心に富んだ者は宇宙に実存を供給する完全無欠な人だというのが、これを証明する公平無私な方法だと思えます。彼が伝えることが欠けていると考えると、充滿する彼

1) キケロ『神々の本性について』1.44.124

2) ボープのこのテーマに関する考えは、『人間論』(1733-34) 参照。

3) キケロ『神々の本性について』1.43.121

4) トマス・ホブズ『リバイヤサン』(1651) 序文。

自身の力と幸福は減じてしまいます。先に取り上げた哲学者たちは実際この議論の説得力を弱めるために、様々なことを提示しました。彼らは神々を最も高尚な祝福状態に据えて、哀れな死すべき私たち人間と同じように利己的なのだと述べ、神々は私たち人間を必要としていないという理由で、神を私たちの関心から締め出しています。しかし、かりに天国にいる神が私たちを必要としていなくても、私たちは絶えず神を必要としているのです。そして確実なことです、御心の計り知れない財産を見渡すことのつぎに、神が受け取る最も高揚する喜びは、無存在という深淵から引き上げられたばかりの無数の生き物がそれぞれに与えられた様々な段階の存在と幸福を喜んでいる様子を見ることなのです⁵⁾。このことは真実ですので、輝かしい神格は、理性的な生き物を形作るときに、自らの姿を損なわないために、この生き物が自分の手から離れるとき自分に似せた姿で飾り立てたのです。知識も愛も限りないので、自分に似ていないものを作っても充足感を得られるはずはありません。この生き物は様々な対象を知って交わることができ、ひたすら神を愛することになります。そういった生き物の頭と心、つまり、愛情と悟性の比率はどんなことになるのでしょうか。また、土台には自己愛しかなく、その自己愛を基礎に交際を維持している生き物たちの社会は、果たして繁栄することが可能なのでしょうか。理性が人々に自らを獲得し確立するための手段として普遍的な幸福を追求させるのは確かです。しかし、これ以外に、他者の幸福と喜びを願う生来の素質が備わっていないと、自己愛は理性の警告を無視して、直ちにあらゆる事態を戦争と混乱状態に陥れることとなります。魂は肉体の死と密接に関わっていると言えますが、先見の明のあるわが造物主は、執拗な欲望である飢えと渴きを不断に繰り返させることによって、その責務を思い出させることが必要だと考えられました。もし私たちが終始冷静かつうわの空で思索に耽り、量を定めるのは理性に任せると、やがて肉体的な生活から逃れて精神性が高まることが分かっているのです。実際、私たちは理性を先取りする意向に導かれ、偏向がかかっているように、強く理性に引き寄せられない限り、何事も心から求めないことに気づくのは明らかです。それゆえ、人々の間での絶え間ない利益の交換を可能にするために、私が申し上げたように、造物主は人々に可能な限り慈悲心という寛大な先入観を与えておられるのです。どう考えても慈悲心はあり得ないと主張することは出来ないはずで、慈悲心は自己愛と矛盾しないのです。人々の行動は逆らいません。地球の日々の回転が1年の回転に逆らわないのと同様です。地球は自転します。それは自己愛が普遍的な慈善心に従って、世間の共通の考えを巡って旋回するのと同じことです。自己愛の力が弱まる、あるいは、利益が慈悲心によって損なわれることはありません。それどころか、慈悲心は明確な行動基準ですが、自己愛に非常に親切であり、思いもよらないときでも手を差し伸べてくれるのです。

ところで、話を理性から事実問題に移します。悲嘆に暮れた人を見て生じる憐憫やより幸せな状態になった結果の満足感は、無条件で公平無私な慈悲心を証明することが出来ません。もし憐憫が自分たちも他者に降りかかる同じ不運な出来事に遭遇するのだと考えた結

5) 第519号参照。

果生じたのであれば、それは現在の目的にとっては何の意味も持ちません。こういった憐憫は生来の感情のわざとらしい動機から生じているのであって、どう見ても憐憫の根拠として許容できるものではありません。なぜなら、子供や自分のことに考えが及ばず、将来のことを考えることが出来ない人でも、強い哀れみを覚えるからです。そして、他人に喜びを与えたり他人の悲しみを和らげたりすることに伴うあの素晴らしい喜びに関しては、対象が数多いと、言葉では尽くせないほど価値のある親切な行為となります。これはひとえに賞賛に値する大いなる魂であることを示すことを行ったという意識から生じます⁶⁾。一方、こういったとき虚栄と自己愛のためだけであれば、この上なく輝かしいと思える行為も素晴らしいものとはならず、神もそれに対して神々しい喜びで報いることはありません。また、自己本位な見方で行った親切行為に与えられる賞賛は、期せずして行ったことで賞賛されるときのように満足の行くものになることはありません。なぜなら、双方とも、自己愛の目的が等しく叶えられるからです。自分が人々に恩恵を施す人だと示す道義心は最も気高い償いとなります。私利私欲を動機にしている人が、いくら滅私であっても、自分に有利なことを何一つ提案できないのは確かです。飢えや渴きを満たすことに伴う喜びはこういった欲望の原因ではなく、何らかの期待に先行するものです。善行をしたいという願望も同様です。この差異は知的な部分に位置づけられます。そして、善行をしたいという願望は理性に先行するのですが、それでも理性によって向上し、また、規制を受けます。これは他でもない美徳なのだとして付け加えておきます。このように、私もこの種の気品を帯びたいと取り組んで来ています。いろいろな証拠を提出して見て、私には、本日のモットーに逆らって、人々には寛大さというものが備わっているのだとの結論を下す権利があると考えます。もっとも、魂の不滅に関してキケロがそうであったように、もし私の言うことが間違っているなら、喜んで間違いをし、同様に惑わされることが人々のためになるのだと信じていますが⁷⁾。これと逆の考え方をしますと、それは当然のように人の心をくじくことになり、善行をするという神のような熱意にとって致命的な卑しい心にしてしまいます。他方、それは人々に恩知らずになることを教え、恩恵を施す人たちに関して、人々は恩恵と恩恵を授ける人とは関係がないという信念に支配されてしまいます。そうになると、人々は慈悲心の流れに栓をして、心の中から感謝の気持ちを追放してしまいます。親切を施すとき、真に寛大な人は見返りを求めませんが、相手の資質に気を配ります。相手が恩恵を受けるに値せず、悪意しかないと分かると、そんな人に進んで親切にする人はいないでしょう。

第589号 1714年9月3日(金曜日)

【バジエル】

無数の打撃でぐらつき、さらに綱で引っ張られた樹は、

6) ロナルド・クレイン「感情の人の系譜」参照。

7) キケロ『老年について』23.85

ついにどうとばかり倒れて、多くの樹々をその重さの
下におしつぶしてしまった。(オウィディウス)¹⁾

前略

私は木々の有難味がよく分かっていますので、ささやかな邸宅を建てようとして選んだ田舎の地面は大きな森のほぼ中心部にあたります。大いに私の意に反しますが、庭に散歩道のようなものを作るために、木々を数本切り倒さざるを得ませんでした。でもその時、散歩道の間は出来るだけ森となるような空間を設けるように心掛けました。左右に目を向けて見ると、そこは森林となっています。自然は人工によって作り出すものよりもはるかに美しい景色を提供してくれます。

チューリップやカーネーションの代わりに、私の庭には樹齢4百年の榿の木々や馬の群れを雨から守る榆の木々があります。

近隣の放蕩者の若い跡取りたちがご先祖の勤勉の賜物であるとても輝かしい記念碑を伐採し、時代の産物を一日にして台無しにしているのを目にしますと、私はこの上ない憤りを覚えます。

貴殿の植栽に関する話を読んでとても嬉しく思いました²⁾。そこで、古代の人たちが木々に対して抱いた畏敬の念を貴殿にお伝えするために、蔵書を調べて見ました。古い言い伝えによりますと、アブラハムはイトスギとマツとスギを植えた、そしてまた、これら3種類の木は合体して1本の木にされて、ソロモン神殿を建設するために伐採されたとのこと³⁾。

コンスタンティウスの治世に生きたイシドロスは、自分の時代でも、アブラハムが住んだと伝えられるマンブレの平原でその名高い榿の木を目にしたと言っています。そして、人々は大きな畏敬の念を込めてその木を見詰め、聖木として保存したと付け加えています⁴⁾。

異教徒たちはさらに、何らかの神が守っているとされる木を傷つけることはとんでもない冒瀆行為だと見なしました。エリュシクトンの話やドドナの森やデルポイの森はすべてこの種の実例です⁵⁾。

この観点から、批評家たちからひどく非難されているウエルギリウスのからくりを考え

1) オウィディウス『変身物語』8.774-6

2) 植栽については、第583号参照。

3) この素材はバイルにある。

4) アブラハムが時々この木の下で涼んだと言われる。この榿の木はコンスタンティウスの時代でも存在したとのこと。

5) テッサリアのエリュシクトンはケレスに捧げられた榿の大木を切り倒したために、罰として「飢餓」がやって来て大変な飢えに苦しんだ(『変身物語』8.738-878)。ドドナはエピルスの奥地にある町で、そこにユピテルの神託を与えるという榿の木があった(『変身物語』7.620,13.716)。デルポイのアポロの神殿も、月桂樹も、神ご自身のもっておられる籠もいっしょに震動した(『変身物語』15.634)。

て見ますと、私たちはそれがそんなに激しいものとは思いません⁶⁾。

アイネイアスはイタリアに向かうために艦船を建造するとき、イーダ山の木を伐採せざるを得ませんでした。しかしながら、彼は祀られているキュベレの許可が出るまではそうしませんでした。キュベレは聖木で作った船をどんなことがあっても守る義務が自分にあると思わずにはられませんでした。そこで、彼女はユピテルに船を荒波や暴風から守って欲しいとお願いをしました。ユピテルはこれを認めませんでした。出来るだけ多くの船を海の女神たちに変えてイタリアまで無事に届けてあげると約束しました。ウェルギリウスはその状況をつぎのように語ります。

こうして、約束の日がやって来た。運命の女神らが
時の定めを満たしたとき、トゥルヌスの悪しき行ないが
母なる神に、神聖なる船から松明を駆逐せよ、と告げた。
このとき、まず、異様な光が目の前に輝くや、巨大な雲が
東の空から天を翔るさまが見え、イーダ山の歌舞団も現れた。
次いで、恐ろしい声が空の上から降りかかり、トロイア軍と
ルトゥリ軍を満たす。「テウクリア人よ、慌てるな。わが船を
守るには及ばぬ。武器を手取るな。まず先に海が
燃え尽きでもせねば、トゥルヌスに神聖なる松材の船を
焼くことは許されぬ。行け、そなたらは解放された。
大海の女神となれ。母神の命令だ」。すると、それぞれの船が
すぐさま岸に繋がれた艦綱を断ち切り、イルカのように
水中へ舳先を沈めるや、海底を目指す。それから、
驚くべき不思議ながら、乙女らが〔その数は以前に青銅を
舳先をはめて立っていたときと同じで〕船と同じ数だけ姿を
現わし、海を進んで行く⁷⁾。

古代人たちがハマドリユアデスと呼ぶ乙女らに関する一般的な捉え方は木の精に対するものです。彼女たちの生死はある木、とりわけ、櫟の木と共にすると考えられました。このため、彼女たちは自分たちの生死がかかっている木々を守る人たちに特別な謝意を表したのです。アポロニオスはこれに関して的を射た話をしてしますので、私の手紙を締め括るにあたってそれをお伝えすることにします⁸⁾。

今にも倒れそうになっている櫟の老木を見て、ある種の同情を覚えたラエクスという名の人物が召使たちに根元に新鮮な土を入れて真っ直ぐにしてあげるようにと命令したので

6) 『アイネーイス』9.77-122, 第315号, 第351号参照。

7) 『アイネーイス』9.107-122

8) ロードスのアポロニオス『アルゴナウティカ』第2巻。アポロニオスは紀元前3世紀のギリシアの叙事詩人。

した。その木と生死を共にせざるを得なかったハマドリュアデスつまり乙女は、翌日彼の元に姿を現わし、彼に感謝の気持ちを述べて、彼のどんな願いでも叶えてあげると言いました。彼女はとても美しい人だったので、ラエクスは恋人になって欲しいと頼みました。その要請に満更でもなかったハマドリュアデスは出会いの機会を作りますと約束しましたが、何日間はほかの女性たちとの抱擁は慎むようにと命じました。いつになるかはミツバチを使いに出して知らせると付け加えました。どうやらラエクスは賭け事に溺れていたようで、忠実なミツバチがブンブンと彼のところに知らせに来た時、たまたま負けが込んでいる最中でした。そのため、ミツバチの親切な招待を無視して、わざわざ知らせにやって来たミツバチをあやうく殺すところでした。ハマドリュアデスは自身の失望と使者の不当な扱いに腹を立て、ラエクスの四肢を使えないようにしました。しかしながら、彼は手足が完全に不自由ということではなく、なんとかその木を、つまり、恋人を伐採出来たのだと、この物語は告げています。

草々